

『紙コップのオリオン』 市川聖久子 著

学校の創立記念行事の実行委員になってしまった、主人公の論里。委員の顧問の先生は、声が大きくて怖いことで有名な先生だった。最初はやる気がなかった委員たちを論里が徐々にまとめて作り上げたのは、校庭一面に広がるキャンドルの星空だった。サプライズとして、花火を持って星々の間を流れ星のように駆けまわる論里たち。その上にいきなり降ってきた怒鳴り声。叱られるのかと思いきや、「そんなに遅い流星があるかあ、もっと本気で走れ！」怖面の顧問の先生の優しい喝に、思わず心が温まる。

71期 Y.S

『ピブリア古書堂の事件手帖』 三上延 著

JR北鎌倉駅の近くにある古書店「ピブリア古書堂」。本作は、その店主である篠川葉子と店員の五浦大輔が、古書にまつわる謎を解き明かすシリーズだ。今回私が紹介したいのは7巻である。この巻では葉子と、母でありながら因縁の相手でもある篠川智恵子がシェイクスピアの初版本をめぐる争う。私が薦めたいベスト心が温まるシーンは、最後に葉子と智恵子が会話する場面である。この二人の会話は人によって感じ方が違うので、興味を持った方はぜひ読んでほしい。

71期 R.K

『獣の美者』 上橋菜穂子 著

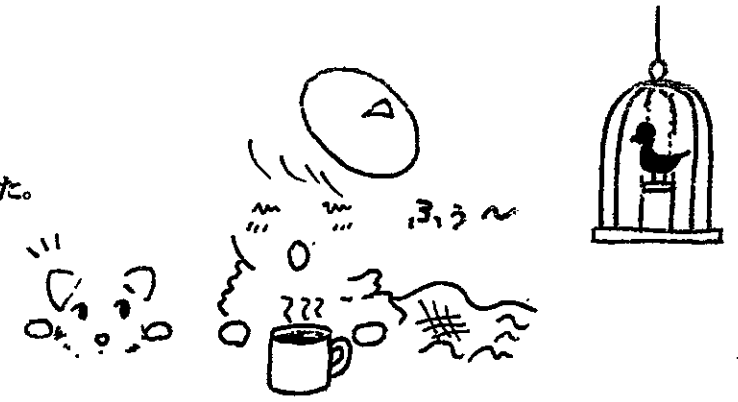
少女エリンの平穏な日々は、罪に問われた母との別れを境に一変する。天涯孤独となってしまうエリンを窮地から救い、家で面倒を見る蜂飼いジョウン。衰弱したエリンに振る舞われた彼の料理は、質素でありつつも、とてもおいしそうで、こちら側にも食感やあたたかさが伝わってくる。そして、彼のそのあたたかくやさしい人柄に、思わずあなたは心を動かされてしまうに違いない。これらの場面は、エリンの壮絶な過去とは対比的に、より鮮やかに描かれている。ジョウンとの日々を糧に、困難に立ち向かっていく少女の物語が、今ここに幕を開ける。

73期 R.C

『コンビニたそがれ堂』 村山早紀 著

夕暮れ時に、風早の駅前商店街に行くと、古い路地の赤い鳥居が並んでいるあたりで不思議なコンビニを見つけることがあるといいます。レジの中では、長い銀色の髪に、金の瞳をしたお兄さんが「いらっしゃいませ、さあ、何をお探ですか？」と明るく、温かい声で尋ねるのです。本当に欲しいものがある人だけがたどり着くことのできる「たそがれ堂」。不思議な魔法のコンビニです。

75期 M.K



『七つの人形の恋物語』 ポール・ギャリコ 著

あなたは人形を持っていますか？ 苦しい時悲しい時、追い詰められた時、あなたを癒してくれる、熊や赤ちゃんなど豊富な種類の人形達。そんな彼らが喋れたらいいのにな…と一度は思った事はありませんか？ この作品の主人公である、少女ムーシェは人形劇団の一座に拾われ、七つの人形たちに温かく迎えられる。しかし、人形遣いのミシェルは彼女にあたって…。ひねくれた一人の人形遣いとおかしな人形たち、そして心優しい少女の感動物語。

72期 M.I

『博士の愛した数式』 小川洋子 著

主人公の「私」は小3の息子と二人暮らしの家政婦。「私」が担当したのは、これまでに9回も家政婦が変わった「博士」だった。彼は一人暮らしで「数学」が大得意。しかし、交通事故により、記憶が「17年前」で止まっている。しかもその記憶が「80分」しか持たなくなってしまった。そんな「博士」・「私」・「息子」が送る日々は、紆余曲折しながらも、「かけがえのない絆」を少しずつ築いていきます。

74期 M.M

『桜風堂ものがたり』 村山早紀 著

銀河堂書店に勤める青年月原一整は、人付き合いは苦手だが、名作を見つけ出して光を当てることが多く、店長から信頼されていた。しかし、万引きをした少年を追いかけたことで書店に迷惑をかけてしまう。そのことで心に傷を負った一整は、知り合いの店長がいる桜風堂を訪ねるが、彼が入院している事を聞く。見舞いに行った一整は、店長から店を当分預けられないかと頼まれ…。一冊の本を巡って、桜風堂と銀河堂の間で起こる温かな奇跡の物語。

75期 Y.A

